

公共政策学教育としてのフィールドワークにおける 南三陸町での経験と教訓

高橋正弘
社会共生学部 公共政策学科 教授
専門分野：環境教育論

キーワード：南三陸、フィールドワーク、震災、体験学習、いりやど

1. はじめに

大正大学公共政策学科は人間環境学科を前身として 2020 年に開設された新しい学科であり、完成年度は 2023 年度末となっている。1~3 年生の第 3 クォーターに実習をすることをカリキュラムに取り入れているのが特色であり、1 年次は「フィールドワークⅠ」という名称で首都圏の自治体で実習を行っている。また 2 年次となった学生は「フィールドワークⅡ」という名称の実習を履修することになっている。この科目はシラバスでは「テーマ」として「人間が豊かで幸せに生きることのできる社会の実現に向け専門的な知見から制度・仕組みを考える」とし、「授業の目的」として「フィールドワークの体験を通して下記の力を養う。①政策の理念、分析の手法、政策形成のあり方といった知識をもとに社会の課題を見出す視点を学ぶ（知識・技能）②社会の課題を自分のこととして捉える当事者意識を培う（関心・意欲・態度）③粘り強く解決策を考え続ける思考力を身につける（思考・判断・表現）」としていて、1 週間程度の事前学習¹⁾を行った上でおおむね 6 日間の宿泊を伴う地方での実習を組み合わせたものである。2021 年度フィールドワークⅡの実習先は、南三陸町の他に、新庄市・栗原市・長井市／飯豊町・五泉市・静岡市・姫路市・飛騨市・京都市であり、それぞれの自治体に 10 名~20 名の学生が振り分けられた。なお地方での実習の他に、フィールドワークⅡの期間に中央省庁から複数の講師を招き、講義を聞いてワークショップを行うという形式の中央省庁学習を 2 週間含めている。

本報告は、2021 年度に実施した公共政策学科のフィールドワークⅡにおける南三陸町での実習²⁾がどのようなものであったかを記録しておくことを通じて南三陸町でのフィールドワークの概要を整理し、また学生たちの事前事後のアンケートを手掛かりにどのような学習プログラムが関心を喚起するかについて経験から教訓を得ることを目的とする。

2. 南三陸町の概要

2011 年 3 月 11 日に日本を襲った東日本大震災による南三陸町内の人的被害は、死者 620 人（うち町民 551 人）、行方不明者 211 人（うち町民 210 人）であった。震災前の人口は 17,666 人（2011 年 2 月末時点の住民基本台帳人口）であったが、現在は 12,218 人（2021 年 12 月末時点の住民基本台帳人口）に減少している³⁾。

大正大学と南三陸町との関係については、2011 年 3 月の東日本大震災が発生した一ヶ月後に、教職員と学生の有志が 4 チームに分かれて 3 日間毎に南三陸町に入り、支援活動を行ったことを契機とする。この時から大正大と南三陸町との関係が始まり、南三陸町が提供できる教育力の室の高さを踏まえて、学生の実習地として大正大学は「南三陸町エリアキャンパス」と捉えて、大学および各学科等による実習を展開するようになった。特に人間環境学科は早くも 2012 年 9 月に南三陸町での学生実習の取り組みを開始し、以降毎年「フィールドワークⅡ」という科目で宿泊型の研修を行っ

てきた（本田・高橋 2022）。

なお南三陸には、「南三陸まなびの里いりやど」（以降、いりやどと表記）という宿泊研修施設が「一般社団法人南三陸研修センター」によって 2013 年 3 月にオープンしている。この施設は大正大学が開設に協力したもので、宿泊だけでなくさまざまな研修に対応している。これまで人間環境学科でもこの施設を継続して利用してきた経緯があることから、2021 年度の公共政策学科のフィールドワークにおいてもこのいりやどを活用した。

3. フィールドワークにおける学習の概要

3-1 事前学習

当初は南三陸を訪問する学生数は 10 名を予定していたが、他の自治体での実施が急遽できなかったため、その 10 名の学生を加えて 20 名の参加者数となったのは、事前学習の直前である。事前学習の期間は出発前のおおむね 1 週間程度となっており、南三陸を訪問するグループについては全 4 回、各 2 コマ分相当の演習を、学内の教室で実施した。初回のみ、対面とオンラインを併用するハイブリッドで行い、2 回目からは対面形式とした。

事前学習の具体的な実施内容としては、2011 年の東日本大震災とその津波被害を映像で紹介しているビデオや、震災後のひとびとの暮らしを作品化したドラマの視聴、および課題図書として重松清氏の『希望の地図』を配布し、それを各人が読み、それぞれ事前学習としてのワークショップを行った。これらにはおおむね全員が、事前学習として設定した 4 日間参加した。事前学習期間中に、必要な荷物の指示や現地での行動の際に必要なとなるグループ分け、部屋割りなどを行い、緊急時の連絡先などの確認を行った。また実習期間中のプログラムの説明をスケジュール表に従って行い、学生が 6 日間の実習に参加する準備として関心を喚起するよう配慮した。なお 4 で取り上げるアンケートのうちの事前アンケートについては、この事前学習期間に行った。

3-2 南三陸町での実際のプログラム

2021 年 10 月 14 日（木）～10 月 19 日（火）に南三陸町で実施したフィールドワークⅡの 5 泊 6 日のプログラムは表 1 のとおりであった。南三陸町までの交通手段は大学発着のバスとなる。休憩時間を含めて片道 6 時間程度かかる。現地では実習期間中、町内の移動にこのバスを活用した。このフィールドワークに参加したのは、公共政策学科 2 年生 20 人と、引率教員 1 人の計 21 人であった。

以下、3-2-1 から 3-2-11 まで、プログラムの実際の内容がどのようなものであったのかの概要を整理する。なお各項のタイトルの後ろに付してある括弧内に書かれているアルファベットは、表 1 の内容欄のアルファベットと関連し、プログラムのどれであるかを具体的に指し示す表示上の工夫である。

表1 南三陸町でのフィールドワークのスケジュール

日程	プログラム	内容	場所	講師
	大正大学集合・出発			
10/14 (木)	旧大川小学校震災遺構見学	A		
	ガイダンス		いりやど研修室	
	震災学習①講話	B	いりやど研修室	くどう総合保険工藤泰彦氏
	震災学習②講話	C	入谷公民館	
	震災学習②現地案内	D	町内一円	震災伝道師佐藤誠悦氏
10/15 (金)	南三陸町長表敬訪問	E	役場2階会議室	南三陸町長佐藤仁氏
	南三陸町職員講話①	F	役場2階会議室	商工観光課課長補佐宮川舞氏
	南三陸町職員講話②	G	役場2階会議室	農林水産課水産振興係長佐藤守謙氏
	南三陸町議員講話	H	いりやど研修室	
	自治体の計画などのレクチャー	I	いりやど研修室	サスティナビリティーS太齋氏
	バイオマスプラント見学、説明	J	南三陸BIO	アミタ(株) 野添幹生氏
10/16 (土)	住民の目線から講話	K	上山八幡宮	上山八幡宮 工藤真弓氏
	感想共有			
	自治体職員の仕事とは		いりやど研修室	サスティナビリティーS太齋氏
	ロジカルシンキングWS	L		
	ふりかえりワークショップ		いりやど研修室	
	南三陸町職員講話③	M	入谷公民館	高橋一清氏
	元南三陸町職員講話④	N	入谷公民館	阿部忠義氏
10/17 (日)	Y E S 工房見学	O	Y E S 工房	代表大森丈広氏
	木工体験	P	Y E S 工房第二工場	
	チームビルディング	Q	Y E S 工房第二工場	阿部忠義氏
	ふりかえりワークショップ		いりやど研修室	
10/18 (月)	AM~PM志津川地区FW	R	旧志津川地区一円	
	昼食		志のや	
	ワークショップ		いりやど研修室	
10/19 (火)	フィールドワーク報告会	S	いりやど研修室	
	いりやどチェックアウト		帰路へ	

3-2-1 旧大川小学校震災遺構の訪問 (A)

実習地である南三陸町に向かう途中、宮城県石巻市にある「石巻市震災遺構大川小学校」を訪問した。大川小学校は津波により児童 70 名が死亡し、4 名が行方不明となった場所である。フィールドワークは南三陸町が学びの場の中心となるが、東日本大震災は東北・関東の太平洋沿岸が被害に遭い、南三陸町以外でも多大な被害が発生していた。南三陸町内には一般見学できる震災遺構がほとんどないが、この旧大川小学校震災遺構は 2021 年 7 月から一般公開されている。津波の被害を受けた校舎が残されていて、校舎の見学に加えて資料館内には震災前後の写真等のパネルや資料が展示されていて、学生たちは各自で見学を行った。地震の発生から津波の襲来までおよそ 50 分の時間があつたこと、学校管理下で多くの児童や教職員が死亡したことなど、避難のあり方を含め学校側の対応が問題視され裁判にもなっていることなどを学び、津波の恐ろしさに加えて防災意識や危機管理への対応を考えることにつなげるよう試みた。

3-2-2 震災学習①講話 (B)

「いりやど」到着後に夕飯を終えてから、まずは南三陸町内の被災者の方から震災当時の状況、復興の課題、今後のまちづくりのあり方等について1時間程度話を聴くプログラムを設定し、くどう総合保険の工藤泰彦氏から話を伺った。工藤氏は震災当時、防災庁舎付近に住んでいたことから、防災庁舎周辺の震災前の様子を知ることができた。幼少の頃より地震が来れば津波が来るという意識があり、大きな地震があった際には津波の高さの予想が警報として出されてきたこと、ただし予想よりも低い高さの津波が多かったため、東日本大震災の時も警報が出たがその高さの津波はこないと思っていたこと、しかし実際は予想以上の高さの津波が来たことなどが語られた。また工藤氏は消防団に入っており、当時の避難の様子やその後の復興の状況を詳細に語り、現在の南三陸町の「人の命を守るまちづくり」の意義についての話もあった。震災によって心のケアの大切さや相手を思いやり、思いを行動に移すことが大切だということに気づくことができたこと、思いを形にするのが思いやりであること、などが語られた。この工藤氏の導入的な話により、学生たちは翌日から本格的に南三陸町での学びやまち歩きをする上で基本的な理解を深めることができたと考えられる。

3-2-3 震災学習②講話・現地案内 (C/D)

2日目の午前中は、震災直後に南三陸消防署副署長となった元消防士の佐藤誠悦氏から、震災当時の被害の様子や消防活動についての話を聞いた。佐藤氏自身は震災当時気仙沼消防署の指揮隊長であり、当時の震災被害の状況、そして奥さんを津波で亡くしている(佐藤 2021)ことから、その思いについての話も聞くことができた。また当時の消防の様子は大変過酷であったため、現在でも PTSD に悩む消防士が多いことも知ることができた。大切な家族を亡くされた思いは痛切であり、学生たちに大変深い印象を与えた模様であった。以上の佐藤氏の話は、震災被害の恐ろしさだけではなく、日常生活がいかにかけがえのないものであるか、そして非常時にリーダーはどのように判断すればいいのかという点に踏み込んでおり、いわゆるリーダーシップについても考える機会になった。

講話の後、佐藤氏の案内によってバスで町内を回り、旧防災庁舎や旧戸倉中学校、ベイサイドアリーナなどを訪問し見学した。旧防災庁舎周辺は現在震災復興記念公園となっており、南三陸町の市街地を襲った津波の高さとされる 16.5m の高さにモニュメントが置かれるなどといった整備がすすんでいる。また旧戸倉中学校は現在戸倉公民館となっている。ここには震災後、旧校庭に仮設住宅が多数設置されていたが、それらは現在では完全に撤去され、元の校庭に戻っている。指定避難場所でもあったこの場所を津波が襲った、という事実は、学生たちに強い印象を与えたようであった。

3-2-4 南三陸町長表敬訪問・南三陸町職員講話①②③ (E/F/G/M)

南三陸町役場を訪問し、まず佐藤仁町長に表敬訪問を行った。その際町長から、南

三陸は養殖の町であり、かつては密殖が問題だったが、震災で流されてしまったため密殖問題が解決されたこと、牡蠣が育つための栄養が不足したことで収穫量が想定していた三分の一に減ったがさらに牡蠣の養殖を四分の一に減らしたことで栄養の問題が解決され、牡蠣の収穫量と質が向上するようになったこと、そして1年のサイクルで牡蠣を収穫できることにより収入も安定するため、若い漁師も増加したことなどが語られた。また志津川湾はラムサール条約の登録湿地となったが、震災後2年での取得というスピードは異例の早さであった、とのことであった。ASC 認証およびFSC 認証の両方を所得している自治体は世界で南三陸町のみであるということから、今後は持続可能な町として「環境を学ぶなら南三陸に行こう」となっていくて欲しい、という期待が語られた。

続いて南三陸町の観光課の職員である宮川舞氏から、震災があった後に南三陸町ではまず復興市の開催を計画したこと、当初は売るものも何もなくあったため開催に反対する声があったものの、ほかの町とネットワークして商品を仕入れ、開催にこぎつけたこと、初回はほぼ町民の安否を確認するような場になったが、それ以降は毎月最終日曜日に開催したことなどの説明があった。そして震災からの復興後は、観光消費による経済の活性化、人流による地域の活性化、世代を超えた地域住民の活躍な場づくり等を目的として観光行政が行われていること。特にふるさと観光講座が研修として開講され、これは都市部に住む人の教育旅行のニーズを活用したもので、農家への民泊等を期待して行われたものだが、一般の町民も多くが受講し、1000人以上が受講したことなどが語られた。さらに農林水産課の佐藤守謹氏は、他地域から南三陸町に移住してきて南三陸町役場に勤めるようになった職員であり、いわゆるよそ者の視点から南三陸町の魅力についての語りを聞くことができた。例えば南三陸には季節によって異なる光景や豊かな自然環境が見られるなど、町民が気づいていないような魅力が多くあるということ、それらを映像の制作によって可視化できるようにしたこと、などの工夫をしていることを聞くことができた。

南三陸町商工観光課の高橋一清氏は、以前から観光課に所属していたこともあり、交流人口増加のための自然環境フォーラムを開催し南三陸を研究の場として使ったこと、自然と観光を織り交ぜて観光開発を行った経緯、などが語られた。また景観が豊かだからといって自然が豊かというわけではないこと、活用されていなかった自然活用館という施設を活用したこと、などについての経験を聞くことができた。

3-2-5 南三陸議員講話 (H)

南三陸町議会議員の後藤伸太郎氏からは、震災当時避難所となった志津川小学校での避難生活の話から始まり、その後の南三陸町の復興の道筋などについての概要を聞くことができた。また後藤氏が南三陸町議会の議員に立候補したきっかけとして町の復興に寄与したかったこと、議会を町民が傍聴したくなる工夫などをしていわゆる議会の見える化の推進を図りたいという願い、現在南三陸町の町議会議員の高齢化が進んでいて若年層の声が議会に届いていないという懸念から若者の地方議会への政治参

加が必要であること、などといった話を聞き、さらに議会を通じての南三陸町の復興やまちづくりについての考えを伺うことができた。さらにこのフィールドワーク終了後に南三陸町で行われる予定の町議会議員選挙等についても、その時の状況の見直しなどについて話を聞くことができた。フィールドワークの最終日が公示日にあたため、出発前にもう一度学生達に会いに来るという約束がなされた。なお最終日のことであるが、実際にバスでいりやどを出発し帰路につく直前に後藤氏がいりやどを再訪し、学生は有権者ではないものの、後藤氏の立候補者としての立ち会い演説を特別に聞くことができた。

3-2-6 バイオマスプラントの見学・説明 (J)

バイオマスプラントでは、アマタ株式会社の野添幹生氏から話を伺った。南三陸町は、人と環境に優しく災害に強い街づくりを目指すべく「森里海ひといのちめぐるまち南三陸町」をコンセプトに、小さな命の巡りと仕事の巡り、自然の巡りという3つの巡りを軸としたバイオマス産業都市構想を掲げていること、その一環として取り組まれているのが、アマタ株式会社を事業主体として展開しているバイオガス施設「南三陸 BIO」であるとのことであった。このバイオマスプラント施設は、南三陸町の重要課題であったリサイクル推進と町内での廃棄物処理システムの構築への解決策として、都市構想の中核を担うリサイクル施設と位置づけられていて、南三陸町内から集めた廃棄物を100%資源にできる施設となっており、地域内の資源循環を促進させる狙いがあるということである。さらには災害時用の非常電力としても利用可能であり、緊急時の防災拠点となりえる可能性を秘めているということであった。なおバイオマス発電のために必要となる生ごみを集めるためには多くの町の人の協力が必要となり、そのような協力体制があって現在の運営が可能となっていることを聞くことができた。なおバイオマスプラントからできた液体肥料については、もともと町でゴミ収集をしていた事業者が新たに設備を導入して配布事業を開始しており、現在も液体肥料の販売を担っているとのことである。つまり行政からの一方的なものではなく、町民、事業者、行政が一体となってこれに関わることによって成り立つ仕組みとなっているのが、この事業の特色であるという説明を聞くことができた。

3-2-7 住民の目線からの講話 (K)

南三陸町の住民目線からの話という目的で、上山八幡宮の宮司の工藤真弓氏から話を伺った。工藤氏は南三陸町にずっと住む人や移住してきた人たちの中で、まちづくりをしてみたいような人が集い、さまざまな提案を行う「かもめの虹色会議」を開催していること、この集まりはすでに8年以上続いており、「いのちめぐるまち」づくりを目指すため、数々のアイデアを出してまちづくりの計画に反映させる試みを続けてきていること、実際に町長を呼んだワークショップを行うなどして目的をもって取り組んできていることなど、住民としての取り組みの実際を聞くことができた。またかもめの虹色会議も含め、いのちめぐるまちづくりを町民に広めるための広報活動や教

育展開も行っていて、これからの南三陸町のまちづくりを行っていく子どもたちに対して、いのちがめぐる、つまり循環していることを少しでも理解してもらうために、紙芝居を作成したとのことである。実際にその紙芝居の読み聞かせを聞き、特徴的なキャラクターを用いて表現することで、小さな子どもでもいのちの循環を理解してもらえるような工夫が施されていることを語りから学ぶことができた。

3-2-8 自治体計画のレクチャー・自治体職員の仕事・ロジカルシンキング WS (I/L)

現在いりやどの理事として教育プログラムの開発運営等の担当をしているサステイナビリティセンターの代表の太齋彰浩氏から、ほぼ一日にわたってプログラムを担当してもらった。

町の将来像として、「森海里ひと いのちめぐるまち 南三陸町」が策定されたこと、そして2013年12月に「南三陸バイオマス産業都市構想」が策定されたことについて、説明があった。ゴミの処理をきちんとすることで経済、物質循環ができるようになること、生ゴミで肥料が賄えれば無駄なエネルギーを使わずに済むこと、BIO では生ゴミが100%資源になりBIOで得られた液肥は南三陸の農家の方に通常の肥料よりも安く購入してもらうことができること、さらにコメ農家の方に使ってもらうことで「めぐりん米」という独自のブランドができること、などといった説明があった。そして南三陸町内に設置された「めぐるステーション」に薪ストーブやユースステーションを置いたことでそこに住民の交流の場が生まれ、小さな経済が回るきっかけになり、多世代交流の場になったことなどといった副次的な効果があったことについても説明があった。

また南三陸町は山に囲まれており、分水嶺がほかの町との境になっていて、その水域がそのまま南三陸町となることの解説をもらった。そして雨水がすべて南三陸町内を通して志津川湾に流れていくことによって、森林や町内の状況が直接的に海に影響するという環境にあること、つまり森林や海を保全することが、そのまま自然環境を守ることもつながっているという説明を受けた。南三陸町では「森里海ひと いのちめぐるまち 南三陸町」というテーマを掲げているが、それはそのまま南三陸町の自然の在り方を反映した計画であるということになるということであった。

また全体の後半部分で、いわゆるロジカルシンキングについてのワークショップを太齋氏のファシリテーションにて行った。ダイエット解決策を考えてロジックツリーを作成する、という具体的な作業をすることを通じて、論理的思考をどのようにスキルとして獲得するか、学生たちが経験する時間となった。

3-2-9 元南三陸町職員講話④ (N)

元南三陸町職員で、現いりやど館長である阿部忠義氏から話を伺った。東日本大震災によって、南三陸町ではさまざまなことが一変してしまい、いわゆる価値観も変わったと感じていたが、当時は震災を悲しむ間もなく心を鬼にして避難所で活動を行っていたこと、その時人間とは助け合う生き物であるということを理解した、というこ

とが語られた。また避難所生活している様子が一つの家族に見え、避難所が一つの生命体であり一人一人が細胞であると感じたことから、避難所という一時的な施設であっても人が交差するコミュニティであることに気づかされた、ということを知ることができた。

いりやどは現在「震災から10年～つながりで地域おこし～」をテーマとしていて、畑を耕すような感覚、つまり若者や移住者が種をまくようにして、地域づくりをしていかねばならないという理念が語られた。

3-2-10 YES 工房見学・木工体験・チームビルディング (O/P/Q)

「いりやど」から歩いて10分弱のところにあるYES工房を見学した。これは震災復興として、地域資源である木材等の加工をするための工房である。工房の代表である大森丈広氏から、工房の紹介および南三陸町の森林・林業の現状について話を伺うことができた、また実際の工房内も見学した。

東日本大震災後、地域住民の「雇用」と「交流」の場づくりを目指し立ち上がったのがこのYES工房であって、南三陸町は津波で甚大な被害を受け、多くの町民が大切な人や物を失ってしまった中で、阿部忠義氏を含む3人でここをスタートしたということである。現在工房のスタッフは20名あまりに増え、失われてしまった被災地の雇用促進の場であるとともに、「楽しく学ぶ」をコンセプトにしている。地域資源を活用したモノづくりを通じて、南三陸の魅力や歴史に触れるワークショップを行ったり、志津川の名産品であるタコをモチーフにしたキャラクターであるオクトパス君グッズや南三陸産の木材を活用した商品を製作したり、繭細工の商品を販売してたりしていることなどを聞くことができた。

またYES工房の体験プログラムでは、南三陸町入谷地区の地元素材を生かしたモノづくりを体験することができる。例えば木工クラフトというプログラムは、南三陸町の掲げる「森里海ひといのちめぐるまち南三陸町」を具体的なものとするため、間伐材を通して山・川・海の循環を学ぶことのできるものとなっている。南三陸の山林は2015年にFSC認証を取得している。しかし山林の手入れの際に出る間伐材は活用されず山に残されていて、他の植生の生育を阻害してしまうことから、YES工房では間伐材の杉枝を利活用したスプーン・フォークづくりをプログラム化し、体験を通して南三陸町の山林の管理について考えてもらう機会としている。この杉の間伐材を使ったプログラムは、林業者にとってもわずかであるが収入源となっていること、近年の新型コロナウイルスによる影響からプログラムの実施が難しく、間伐材の利活用が追い付いていないことが問題である、といったことが語られた。

その後、学生たちは実際にスギの間伐材の枝をつかったスプーン・フォーク作り体験のプログラムに取り組み、それぞれスプーンもしくはフォークを完成させたこと、またこの作業を通じて南三陸で行われている森林資源の活用の具体事例を体験的に学ぶことができた。

さらにその後に行われたチームビルディングというプログラムは、YES工房が開発

したもので、複数の材を組みあわせていきながら木製のジャングルジムを組み立て、完成後はまたそれをバラしていくという作業を行うことによって、成功体験とチームの一体感を獲得してもらうという内容のものである。コロナの影響でこのプログラム実施が1年以上ぶりということもあったが、無事に想定の時間内で組み立て作業と解体作業がすすんだ。これにすべての学生が参加した。危険防止のため全員がヘルメットと軍手を着用し、また全員で声を掛け合って協力しながら作業に取り組んでいく様子が見られた。

3-2-11 グループに分かれてのまち歩き (R)

前夜に班ごとにワークショップを行い、志津川地区でのまち歩きに向けて各グループがそれぞれどのようなテーマでどのように歩き見学をするのかを検討し、プランを作成して報告する、という作業を行った。そこで完成したプランを踏まえて、午前中から午後にかけて、グループに分かれ、志津川地区を歩いて回るプログラムを行った。解散と集合場所を「さんさん商店街」とし、昼食はグループごとに「志のや」を訪問するという設定をした。

このまち歩きの際に必ず訪問してもらいたい場所として、教員からは旧防災庁舎、旧高野会館、復興住宅、上山八幡宮を挙げたが、これら以外にも一カ所以上グループで話し合っていきたいところを加えるように指示した。また、もしまち歩きの際に町民の方々と話ができる機会があれば、密や濃厚な接触とならないように留意することで、話を聞いてみることは可能であるという指導をした。

グループでまち歩きをした5日目の夜は、実際にまち歩きで見たこと経験したことをふまえて、各グループが具体的にどのような学びを得ることができたかについて、翌日に開催する報告会で発表する準備作業を行った。まち歩きで得ることができた気づきを、自分たちで撮影した写真とともにパワーポイントに整理し、発表原稿を作成する作業をグループ毎に進めた。特に町民の方々に話を聞いた場合にはその内容も取り入れて発表原稿の中に組み入れていった。いりやどの消灯時間が0時となっているため、それまでにはすべての班が準備の完成させることとした。

3-2-12 フィールドワーク報告会 (S)

前日の志津川地区まち歩きの報告会は、午前中に「いりやど」の研修室でグループごとに行った。各グループの発表時間はパワーポイントを使いながら、おおむね10分程度と設定した。まち歩きを通じて南三陸町の魅力を認識し、大学や自宅に戻ってからも家族や友人にその魅力を伝えたいと話すグループ、防災庁舎といった震災遺構の役割を改めて考えたグループ、防災の備えをどのように進めていくのかを行政・住民のそれぞれの視点から考察するグループ等さまざまであった。

報告会の最後に、いりやどの職員および今回フィールドワークの引率をした教員からも、全体的な講評を行った。この報告会の後いりやどを出発し、まず「さんさん商店街」で各自昼食をとりつつお土産なども購入し、その後バスにて大学への帰路に

ついた。大学に到着して解散したのはおおむね午後6時30分頃となった。

4. 学生によるプログラムの印象

南三陸町での「フィールドワークⅡ」の参加学生に対し、現地でのプログラムに参加する事前と参加した事後のそれぞれの時点で、アンケート調査を行った。事前調査は出発直前の2021年10月12日に、そして事後調査は2021年10月21日に、どちらもMicrosoftのフォームスを用いて行い、参加した20名の学生全員が回答をした。この調査は記名式で行ったものであり、アンケートの質問については6つの大問、計28の枝問で構成されている(表2)。

ここでは枝問の中から、「南三陸町でのフィールドワークのプログラムで関心を持っているもの(3つ)」と「南三陸町でのフィールドワークで最も関心があるもの(1

表2 事前・事後に行ったアンケートの調査項目

大問	枝問
属性	氏名
各公共政策領域への関心	観光や観光政策への関心
	福祉や福祉政策への関心
	まちづくりへの関心
	防災や減災への関心
自然への関心	文化や文化政策への関心
	自然にふれたり自然のもので遊ぶことは好きですか?
南三陸町での学習のレディネス	「東日本大震災」と聞いてイメージするもの(1つ)
	「南三陸町」と聞いてイメージするもの(1つ)
	東日本大震災について知っている程度
	東日本大震災の被災地での取り組みについて他の人に説明できる程度
	南三陸町は生活者が安全にいらしていただける環境になっていると思うか
	南三陸町で暮らしていく上での課題がどのくらいあると思うか
	あなたは南三陸町のために何かしようと思うか
	あなたは南三陸町でのフィールドワークに参加するのは楽しみか(楽しかったか)
	南三陸町でのフィールドワークのプログラムで関心を持っているもの(3つ)
	南三陸町でのフィールドワークで最も関心があるもの(1つ)
ESD能力の	南三陸町での復興支援のためにいくら支出できるか(したか)
	体験型学習は好きか
	グループ学習は好きか
	本やテレビで知ったことについて、「本当かな?」と考えることがあるか
	「どうしてだろう?」「どうすればよいだろう?」などと工夫して考えているか
	1つのやり方だけでなく「他にもないかな?」と考えることは得意か
	自分で考えたことを説明することは得意か
何か問題に取り組むとき、他の人と協力することができるか	
自由記述	話し合いに積極的に参加することができるか
	日本や世界で起こっているニュースに関心があるか
	南三陸町でのフィールドワークで期待していること等について自由記述

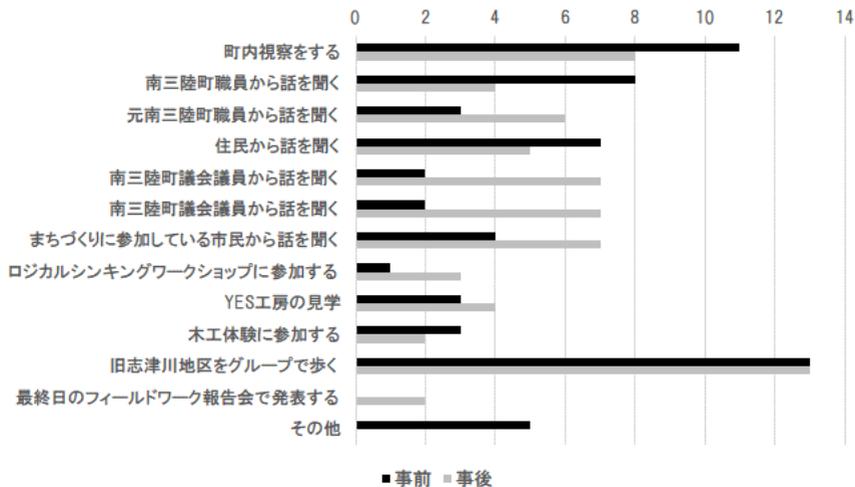


図1 南三陸町でのフィールドワークのプログラムで関心を持ったもの（3つまで）

つ)」そして「南三陸町での復興支援のためにいくら支出できるか(したか)」の3つの質問を取り上げ、事前と事後の回答の比較を行うこととする。

4-1 南三陸町でのフィールドワークのプログラムへの関心（複数回答分）

図1は、選択肢を示して、参加する南三陸町でのフィールドワークのプログラムのどの内容に関心を持っているかを事前調査で、またどの内容に関心を持ったかを事後調査で、それぞれ3つまで回答する形式で尋ねた結果である。これを見ると、旧志津川地区をまち歩きするプログラムが事前と事後を通して高い関心を持たれたことが明らかとなった。また南三陸でさまざまな関係者から話を聞くことについては、事前よりも事後の方が高い関心が示されるようになってきていることがわかる。

4-2 南三陸町でのフィールドワークのプログラムへの関心（単数回答分）

前述の3-3-1では、南三陸町でのフィールドワークのプログラムへの関心について複数回答形式で尋ねたものである。そこで最も関心を持っているもの、関心を持ったもの、という尋ね方で選択肢の中からひとつだけ回答をしてもらった結果は、図2のとおりである。

旧志津川地区をまち歩きするプログラムが事前と事後を通して高い関心を持たれたことは、図1の複数回答と同じ傾向であった。しかしながら住民やまちづくりに参加している市民から話を聞くというプログラムや、バイオマスプラントの見学などが、事前に比べて事後に大きく増加していることも明らかになった。

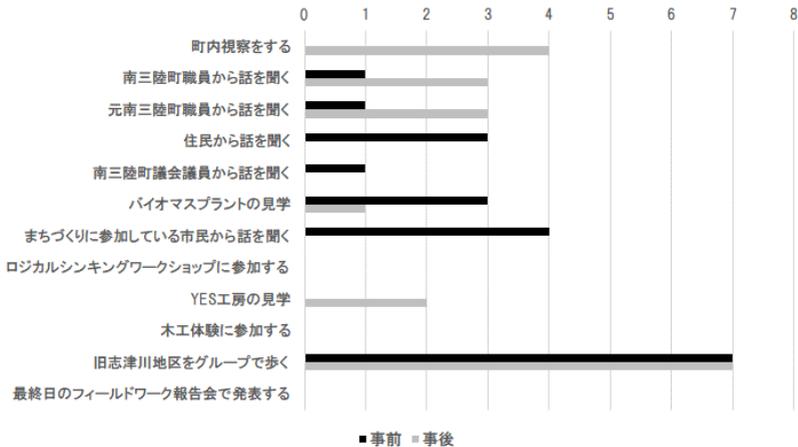


図2 南三陸町でのフィールドワークのプログラムで関心を持ったもの（1つのみ）

4-3 南三陸町での復興支援のための支出意志・行為

アンケート調査では、「南三陸町での復興支援のためにいくら支出できるか（したか）」という質問項目を設定し、0円（支出しない）から10,000円程度、もしくはそれ以上の範囲で段階を設定して選択肢を示し、どれかを選択させる質問をした。事前事後の結果は、図3のとおりである。

具体的な金額を明記してもらっていないため平均金額の推移をみることはできないが、事前アンケートで一番多かったのは1,000円程度で6名、しかし事後アンケートで一番多かったのは5,000円程度で8名、という結果であった。このことから、事前の支出意志に比べて事後の支出行為の方が、全体的に金額的に上昇しているということを読み取ることができる。

4-4 小括

図1～3の結果を踏まえれば、以下のとおりとなる。まずあらかじめ関心を持っていて、かつ実際にプログラムを経験した後で関心を持った内容の比較では、事前と事後とではあまり大きな差は表れていないという傾向が見られた。このプログラムの場合には志津川地区をまち歩きするというものが高い関心が示されたことになる。そして3つまで回答できる結果を示した図1を見れば、事前と事後とで大きな差があまり見られない、ということが理解できる。もちろん子細に注意すれば関心には一定程度の変化が生じている。それらは特に、プログラムに参加した結果として得られた情報や知識に関連していると考えられる。現場で人々の語りを聞くことによって、または南三陸の関係者の口から語られた具体的な内容によって、そして実際のプログラム参加を通して現場から得られた情報によって、満足度が高まったことからプログラムの内容への関心に移ったり強化されたりした、と考えられる。

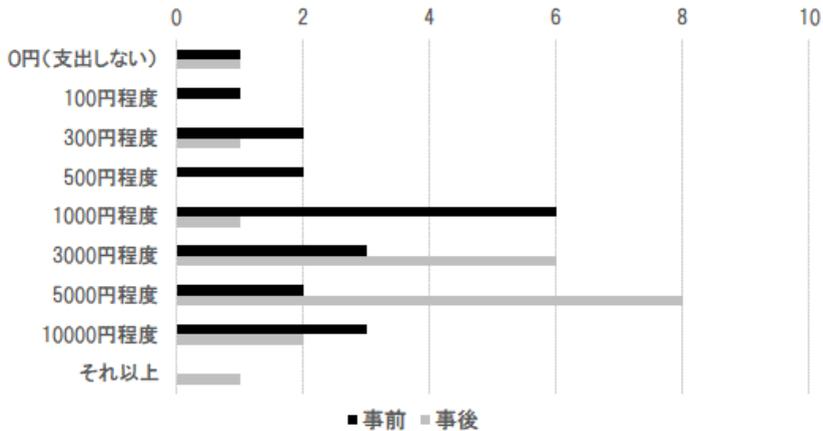


図3 南三陸町の復興を支援するためにいくら支出できる・したか

支出意欲や支出行為ということについては、南三陸の復興に経済的に直接関与することができる数少ない実行可能で容易なコミットメントのひとつであると考えられる。事前よりも事後において、そのコミットメントへの意志が強いということは、全体的な金額がより高額な方向に推移していることから理解することができる。このような態度の変化が見られたということはこのプログラムの効果のひとつであり、またこのような事前事後での変化を見いだす調査方法が効果の一側面を測定する可能性があると考えられる。

5. まとめと考察

本報告では、2021年度に開講された「フィールドワークⅡ」の中で、南三陸で実施したプログラムの概要を整理してきた。この整理によって、具体的に計画した学習プログラムの内容と、実際の内容をとともに示すことができた。これはあくまでも南三陸町でのフィールドワークの経験を整理したものであるが、公共政策フィールドワークとして、今後他の地域や自治体で実習プログラムを開発する際の参考となることが期待される。

加えて、フィールドワークに参加する事前と事後とで参加学生を対象として実施したアンケートの比較の試みから、どのようなプログラムが学生の関心や意欲に変化を生じさせていたのか、ということの手がかりを得ることができた。そして、学生があらかじめ抱いた関心をどのように推移させ、態度を変化させたかということ把握するために、事前と事後とで同じ質問を用いたアンケート調査を行い、それらを比較するという作業によってある程度傾向を見出すことが可能である、という示唆を得ることができた。この調査では参加者数が限られているため、統計検定による有意差の

有無が確認できず、統計的な正確さを示せるまでは踏み込めていないという限界はある。しかし単純集計の結果であったとしても、学生の変化を数値の動きによって把握するには、簡易的ではありつつもある程度は認められる手法であると考えられる。例えば南三陸町でのフィールドワークの全体的な感想については、4 で取り上げたアンケートの他の項目でも把握することが可能である。事前のアンケートで「あなたは南三陸町でのフィールドワークに参加するのは楽しみですか？」に対しては、「とても楽しみ」と回答した学生が 15 名であったのに対し、事後のアンケートでは「あなたは南三陸町でのフィールドワークに参加したことは楽しかったですか？」と尋ねたことについて「とても楽しかった」と回答したのが 20 名中 18 名となっている。このことから、上述の南三陸でのフィールドワークは、ある程度の数の学生にとって、満足度の高い学習プログラムとして受け止められたということが推察される。

学生の満足度を高める一般的な法則についてはまだ十分な経験が得られていない段階ではあるものの、以上を踏まえて引率した教員として考えた今回のフィールドワークの教訓をまとめれば、以下の 2 点に整理できる。

ひとつは、一定程度の時間をかけた事前学習を提供することにより、現地を訪問することについて関心を喚起することができるということである。事前の学習を全くしない状態で現地を訪問しても、学生ひとりひとりにあらかじめ相当程度の学力や能力が備わっていなければ関心を引き出すことすら難しいのではないかと考えられる。大正大学の学生はいわゆる普通のレベルの学生であるため、事前学習として導入となるプログラムを設計し提供することで、関心を高めることができ、また現地でのプログラムの受容もスムーズになると考えられる。

もうひとつは、現地の人の語りを聞くようなインプット型の機会と、学生たちが現地で実際に活動するアウトプット型の機会をバランス良く配置することである。この点については、インプットのみになると情報過多で散漫な印象となってしまうことが予期され、またアウトプットだけとしても、学生には得手不得手があることから他の学生と足並みがそろわなくなり、班での活動が成立しなくなるという危惧が生じると考えられる。今回の南三陸町でのフィールドワークでは、話を聴く機会が行政職員のみではなく複数の町民としたことも、公共政策を考える上で良い選択であったと考えられる。なおどのようなバランスによる配置が良いかについてはさらなる検証と検討が必要であるが、このようなプログラム上の工夫は今後も他の事例を通じて検討していくことが求められよう。

これら以外に付言するとすれば、教員として個々のプログラムの前後等にコメントや解説を学生に向けて発信することを通じて、考え方を理解したり判断の仕方を獲得したりする面での指導としてはかなりの程度踏み込むことができたと考えている。さらにまた実習中の生活指導も実際にはかなり力を入れて行ったことも挙げられる。例えば食事は全員が揃ってから開始する、食事の前後は合掌と「いただきます」もしくは「ごちそうさま」と言う、などといったことまで指導を行った。このような指導上の細かな工夫については、本報告ではほとんど記述することができなかったが、テク

ニカルに寄りすぎる嫌いもあるが諸般の工夫をしていくことも、実習としてのフィールドワークから学生がメンタル的に離脱することを防止し、むしろ高い満足感を持って実習を終わらせるという目的にとっては重要なことは言うまでもない。

本報告では、2021年に南三陸町で実習を行った経験から何らかの教訓を析出するという試みを行ったが、このような経験や教訓を他の地域における実習型プログラムの開発に具体的に援用したり、もしくはプログラムの成否についての検討材料として考察をしたりする試みに取り組んでいく作業は、引き続き今後の課題としたい。

[補注]

- 1) 大正大学では通常「事前学修」と表記するが、ここでは一般的に「事前学習」という表記を採用している。
- 2) 2021年のフィールドワークの実施では、新型コロナウイルスの感染対策として、大学でのワクチン接種を7月以降に実施しており、かつ出発前に全員を対象にしたPCR検査を行った。またフィールドワーク中は飲食時以外においてはマスク着用を厳守とした。これは南三陸町でのフィールドワークに限らず、フィールドワークⅡ全体の方針であった。
- 3) <https://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/10,30155,56,239,html>
南三陸町役場のホームページにおける人口情報 (2021年1月31日閲覧)

[付記]

南三陸町でのフィールドワークは、いりやどの阿部忠義館長をはじめとする南三陸の多くの皆様の多大なご協力とご支援の下で、実施することができました。ここに厚く御礼申し上げます。また実際に6日間のフィールドワークに参加してプログラムを体験し、かつ事前事後のアンケートに協力してもらった、公共政策学科の20名の学生たちにも感謝します。

[文献]

- 本田裕子・高橋正弘 (2022) 宮城県南三陸町でのフィールドワークをふりかえって—大正大学人間環境学科の取り組み、大正大学人間環境論集、9、19-38 頁
- 佐藤誠悦 (2021) ≪東日本大震災 10年の思い≫ 亡き妻に捧げるラブレター、三陸印刷株式会社